『女の世界』におけるオスカー・ワイルドの性の政治学

―ワイルドが予定した寄稿者たち―

角　田　信　恵

Sexual Politics in Oscar Wilde's *Woman's World*

―Intended Contributors―

Nobue Tsunoda

I

1980年代のゲイ批評・クイア批評の勃興とともに，オスカー・ワイルドをめぐる批評は大きく変わった。ワイルドが女性雑誌の編集をしたことの意義を検討しようとする論文が1990年代後半にいくつか出たのも（Green; Clayworth; Ksitan 参照），そうした批評の変化の一環だろう。ワイルドが1887年から1889年にかけて『女の世界』の編集に携わったという事実は，従来は伝記上のひとつの挿話に過ぎなかった。その仕事はいやいやながら金のために引き受けた片手間仕事であったとするのが従来の見方だったのである。しかし，ワイルドの性の政治学に批評の焦点を当てれば，事情は違ってくる。男であるワイルドが女性雑誌の編集をする，しかも当時高まりつつあったフェミニズムの運動を積極的に推進するような記事を積極的に掲載しようとした，というわけなのだから。

ワイルドがカッセル社から『淑女世界』の立て直しを依頼されたとき，まず性の政治学を問題にしたことは明らかだ。彼はカッセル社の重役であったウィームズ・リードにあてた1887年４月の手紙で次のように述べている。

> お送りいただいた『淑女世界』を細かく読ませていただきまして，その編集やある程度は立て直しの仕事に加わることができましたら，まことに幸甚でございます。現状ではそれはあまりにも女々しており（フェミニン），十分に女らしい（ウーマンリー）とは言えないかと思います。……われわれはもっと高い見地に立つと同時に，もっと広い領域を視野におさめ，女が身につけるものだけではなく，女がどう考え，どう感じているかをも扱うべきでしょう。『淑女世界』は，文学や美術や現代生活のあらゆる問題について，女が意見を発表する機関として定着させるべきでしょうし，同時に，男も楽しく読めて，寄稿を名誉なことと考えるような雑誌にすべきです。（Wilde 297）

さらに同じくリードにあてた同年９月５日の手紙では，『淑女世界（レイディーズ・ワールド）』という誌名は通俗的だとして，それを『女の世界（ウーマンズ・ワールド）』と変更するように強く要求している（317）。上の引用にある「女々しており（フェミニン）」という語と「女らしい（ウーマンリー）」という語の対比は，前者が「弱々しい，女々しい」といった否定的意味合いをもつのに対して，後者はそうした意味合いを排除して，女を男の対立項として位置付けよ

うとするものだろう。同様に，誌名から淑女（レイディー）という語を排して，女（ウーマン）という語を使おうとするワイルドの提案には，「地位の高い低い，ちゃんとした女と汚れた女といった陳腐な区分に抗し，そうした境界線を新たに消し去って，すべての女の連帯という意義」があるだろうし（Ksinan　413），さらには読者層を「新しい女」に向け変えようというねらいもあっただろう（Clayworth 89）。Clayworth が指摘するように，当時の婦人参政権運動は常に“women’s suffrage movement”であって，決して“ladies’ suffrage movement”とは呼ばれなかったのである（99）。

こうして，『淑女世界』は『女の世界』として新たに発足する。だが，『女の世界』におけるワイルドのこうした性の政治学をどう評価するかは，評者によってさまざまだ。Clayworth がワイルドの「動機はむしろ計算ずくで，おそらくは皮肉なものだった」としているのに対して（89），Ksinan は「『女の世界』はフェミニズムに対するワイルドのおおっぴらな支持を示している」と評価している（424）。さらに Green は，男性的／女性的という二項対立を崩そうとする姿勢が少なくともサブテクストとして読み取れる点でこの雑誌を評価しつつも，実態としてはそれは「女に自由や冒険を示しながら，彼女たちの最高の努めは家庭にとどまることだと告げている」と述べるのである（112）。

だが，本稿は『女の世界』が現実にいかなる雑誌であったかということの検討をしようとするものではない。そうではなく，ここで検討したいのは，編集を引き受けた当初，ワイルドがどのような雑誌を目指し，どのような人々に原稿を依頼しようと考えたか，ということである。それは同時に現在忘れられつつある当時の多くの女たちを掘り起こす作業とも重なり合うはずである。

Ⅱ

ワイルドが1887年４月にウィームズ・リードあてに出した手紙の，上の引用に続く部分を見てみよう。

> できれば，ルイーズ王女[(1)]やクリスチャン妃[(2)]にも寄稿していただき，たとえばクリスチャン妃の場合など，校長をされている芸術学校との関連で針仕事についての論考がいただければ，大変興味深いものとなりましょう。カルメン・シルヴァ[(3)]やマダム・アダム[(4)]にもぜひ執筆していただきたいものですし，ボストンのジュリア・ウォード・ハウ夫人[(5)]をはじめ，アメリカの教養のある女性にも寄稿をお願いしましょう。同時に，われわれの寄稿者のリストには，次のような女性たちをお願いすべきでしょう。レイディ・アーチボルド・キャンベル[(6)]は魅力的なものが書ける人ですし，レイディ・アーディロウン[(7)]にはアイルランドでの体験談がお願いできるでしょうし，ジューヌ夫人[(8)]，ミス・ハリソン[(9)]，ミス・メアリー・ロビンソン[(10)]，『アフリカ農場物語』の著者であるミス・オリーヴ・シュライナー[(11)]，それに実によくできたモントローズ伝を書かれたレイディ・グレヴィル[(12)]，ミス・ドロシー・テナント[(13)]，レイディ・ヴァーニー[(14)]，レイディ・ディルク[(15)]，レイディ・ダファリン[(16)]，レイディ・コンスタンス・ハワード[(17)]，マシュー・アーノルドのお嬢さん[(18)]，レイディ・ブラッシー[(19)]，レイディ・ベクティヴ[(20)]，レイディ・ロズベリー[(21)]，レイディ・ドロシー・ネヴィル[(22)]（彼女にはウォルポール家について執筆をお願いできるでしょう），シングルトン夫人（ヴァイオレット・フェイン）[(23)]，レイディ・ダイアナ・ハドルストン[(24)]，レイディ・キャサリン・ギャスケル[(25)]，レイディ・パジェット[(26)]，ミス・ローザ・マルホランド[(27)]，エミリー・ローレス閣下[(28)]，レイディ・ハーバー

トン[29]，チャールズ・マクラーレン夫人[30]，レイディ・ポロック[31]，フォーセット夫人[32]，ミス・ペイター（『メアリウス』の作者の妹）[33]など，ほかにも手紙では書き切れないほどの方々がおられます[2]。

……そしてわが国のチャーミングな女性たちのなかには，これまで執筆活動をほとんどされていなくても，一族の肖像画のコレクションなどについて書いていただけそうな方たちがたくさんおられます。レイディ・ベティ・リットン[34]にはネブワースについての記事が（イラスト入りで），レイディ・ソールズベリー[35]にはハットフィールド・ハウスの描写がお願いできるかもしれません。このお二人にはもちろん執筆や出版の経験がおありですが，そうした経験のない多くの方たちも，エッセイを書かれてはいけないとする理由はありません。執筆を求められて，不快になる女性はいません。プロクター夫人[36]に回想録が書いていただければ，大変貴重なものとなりましょうし，レイディ・ゴールウェイ[37]に論考がお願いできれば，愉快なものができるでしょう。しかし，たとえ署名入りの記事であっても，執筆者は女性に限定するべきではないでしょう。芸術家には性別がありますが，芸術には性別はありません。ですから，時々は，だれか男性の文学者による論考があってもいいかと思います。……

時々は，ケンブリッジのガートン学寮やニューナム学寮，そしてオックスフォードの女子学寮についてのニュースを提供したり，そのメンバーに記事を書いてもらうべきです。ハンフリー・ウォード夫人[38]やシジウィック夫人[39]は欠かせませんし，オックスフォードのモードレン学寮の例の若い学寮長の夫人[40]なら，その学寮について，もしくは，たとえば大学が始まってから現在に至るまでの，大学の女性に対する態度――これはこれまで十分に論じられたことのないテーマです――について書いてもらえるでしょう。（Wilde 297―98：括弧に入れた数字は引用者による。）

ワイルドはここで40人の女の名前を挙げているが，『オスカー・ワイルド全書簡集』は彼女たちをひとまとめにして，「この多数の文学関係の女性たちの多くに関しては，ほかのところに注がある」という注を付しながら（ただし，最後の「オックスフォードのモードレン学寮の例の若い学寮長の夫人」については，「1885年10月に夫がその任に選出されたT・ハーバート・ウォレン夫人のこと」という注がある），実際にほかのところに注がある女は，マダム・アダム，ジュリア・ウォード・ハウ夫人，レイディ・アーチボルド・キャンベル，ジューヌ夫人，ミス・ドロシー・テナント，レイディ・ドロシー・ネヴィル，シングルトン夫人（ヴァイオレット・フェイン），レイディ・パジェット，レイディ・ポロック，レイディ・ベティ・リットン，レイディ・ソールズベリー，シジウィック夫人の，40人中12人だけである。全体にわたって行き届いた注の付されたこの『書簡集』らしからぬこの不手際は，おそらくその編者たちのこれらの女に対する軽視を物語っていよう。むろん，彼女たちのほとんどは人名辞典や文学史にも記載されていない。彼女たちのなかで *New Encyclopaedia Britannica*（15th ed）に載っているのは，ジュリア・ウォード・ハウ夫人，オリーヴ・シュライナー，フォーセット夫人の３人であり，また『平凡社世界大百科事典』に載っているのは，その３人にメアリー・ロビンソンを加えた４人という具合である。実際，彼女たちのほとんどが○○夫人やレイディ・○○といったかたちで夫の陰に隠れてしまい，きわめて調べにくい存在になってしまっていることも，当時の女の状況を示唆している。

彼女たちがいかなる女であったのかを調べた結果を次に記す。それにあたっては，事典類に載っ

ていない女たちについては，より詳しく記すことにする。

(1) ルイーズ妃：Princess Louise（1848－1939）。ヴィクトリア女王の四女。ヴィクトリア女王の娘のなかで一番美しく，才能豊かな王女。絵画や（当時女らしくない技芸とされていた）彫刻にすぐれた才能を示し，1868年，ケンジントン国立美術訓練学校（Kensington National Art Training School）に入学した。公教育を受けた最初の皇族。1871年，後に第九代アーガイル公爵となるローヌ侯爵ジョン・ダグラス・サザランド・キャンベル（John Douglas Sutherland Campbell, Marquis of Lorne）と結婚。中産階級の貧しい女性が針仕事で収入を得られるように訓練する教育機関，Ladies' Work Society を創設。1872年には全国女子高等教育連合（National Union for the Higher Education for Women）の設立とともにその初代総裁になり，積極的な活動を展開した。彼女の彫刻は今も数点，ロンドンに残っている。（Lewis）

ワイルドはこの手紙のなかで「クリスチャン妃の場合など，校長をされている芸術学校との関連で針仕事についての論考がいただければ」と述べているが，これは明らかにルイーズ妃のことを間違って述べたのだろう。

彼女は『女の世界』には寄稿していない。

(2) クリスチャン妃：Princess Christian（1846－1923）。ヴィクトリア女王の三女，ヘレナ（Helena）のこと。水彩画をよくした。1866年，ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタインのクリスチャン王子（Prince Christian of Schleswig Holstein Sonderburg Augustenburg）と結婚。夫とともにイギリスに住んだ。翻訳や著作にも手を染め，1887年「バイロイト侯爵夫人，ウィルヘルミナの回想録」"The Memoirs of Whilhelmine, Margravine of Bayreuth"をフランス語から翻訳，またバイロイト侯爵夫人とヴォルテール（Voltaire）の書簡も翻訳した。1884年には姉のアリスの回想録も出版している。さらに看護学にも強い関心をもち，「傷病人の応急手当」（"First Aid to the Injured"）というパンフレットも翻訳している。さらに詳しくは Ibarra を参照のこと。

ワイルドは彼の編集になる『女の世界』の最初の号，1887年11月号のなかの編集者のコラム「文学的，その他の短信」のなかで，クリスチャン妃による「バイロイト侯爵夫人，ウィルヘルミナの回想録」の翻訳を批評している。彼女は『女の世界』に「女の職業としての看護」"Nursing as a Profession for Women"を寄稿している。

(3) カルメン・シルヴァ Carmen Sylva：ルーマニア王妃エリザベス（1843－1916）。ドイツ貴族の家に生まれ，1869年，ルーマニアのカロル１世と結婚。ルーマニアの文化向上のために尽くし，カルメン・シルヴァというペンネームで盛んな執筆活動をした。執筆には，ドイツ語，フランス語，英語，ルーマニア語のいずれも用いることができた。作品には，*A Heart Regained*――*A Novel*（1888），*Songs of Toil*（1888），*Edleen Vaughn or Paths of Peril*（1891），*Legends from River and Mountain*（1896；Alma Strettell と共著），*A Real Queen's Fairy Tales*（1901），*From Memories Shrine*（1911），*Letters and Poems of Queen Elisabeth*（Carmen Sylva）（1920），*Golden Thoughts of Carmen Sylva Queen of Roumania*（？），*Poems*（？），*Shadows on Love's Dial*（？），*Suffering's Journey on the Earth*（？）などがある（"Carmen Sylva Queen Elisabeth of Romania Bibliography"参照）。

『女の世界』には"A Queen's Thoughts", "Furnica; or the Queen of the Ants. A Legend of the Car-

pathians", "Decabal's Daughter"の３篇を寄稿している。また同誌には Mrs. E. B. Mawer による""Carmen Sylva," the Poet-Queen"という記事も掲載されている。

(4) マダム・アダム Madame Adam：ジュリエット・アダム（旧姓ランベール, 1836－1936)。著作家で政治活動家。1879年,『新評論』を発足させ, 二〇年間その編集に携わった。ジョルジュ・サンド，ギュスターヴ・フロベール，ヴィクトル・ユーゴーの友人であり，ポール・ブールジェとは特に親しかった。1867年, 金融業者で熱烈な共和主義者で1848年の革命に参加したエドマン・アダムと結婚。新ギリシア主義への共感から生まれた彼女の小説，*La Patienne* は，女性のすべてを奪いつくす情熱を描くもので, 1883年に出版された。

『女の世界』には寄稿していない。

(5) ジュリア・ウォード・ハウ夫人 Julia Ward Howe：(1819－1910)。アメリカの著作家，改革者で，南北戦争北軍の軍歌「リパブリック賛歌」(1862）の作詞者として有名。1843年，盲人教育家で奴隷制廃止論者で社会改革者のサミュエル・グリドレー・ハウと結婚。南北戦争後に彼女が起こした運動は後に母の日の成立のもとになった。また後年は女性の権利推進のために活動し，アメリカ婦人参政権協会の会長など，いくつかの婦人参政権運動の組織で重要な役割をはたした。著書に詩集,『マーガレット・フラー伝』(1882),『現代社会』(1881）がある。ワイルドは1882年に初めてボストンを訪問したとき彼女と知り合い, 親しくつきあった。

『女の世界』には寄稿していない。

(6) レイディ・アーチボルド・キャンベル Lady Archibald Campbell：Janey Sevilla Campbell（1845－1923)。旧姓 Callander。1869年第八代アーガイル公の二男，Archibald Campbell と結婚。夫とともに屋外での牧歌劇の上演を奨励，アマチュア俳優・著作家であった。大変な美人であり，またホイッスラーの親しい友人で，彼の絵のモデルになった。ワイルドは彼女のことを"the Moon-Lady, the Grey Lady, the beautiful wraith with her beryl eyes"とたたえている（Wilde 174)。

『女の世界』には創刊号の巻頭の記事，"The Woodland Gods"を寄稿している。またワイルドは *Dramatic Review*（1885年６月６日号）に"'As You Like It' at Coombe House"という記事を書いて，彼女がオーランド役を演じたのを賞賛した。

(7) レイディ・アーディロウン Lady Ardilaun：Guinness, Lady Olivia Charlotte（1850－1925)。旧姓ヘッジズ＝ホワイト（Hedges-White)。the last Earl of Bantry の姉妹で，第二代アーディロウン准男爵アーサー・エドワード・ギネス(1840－1915)の妻。夫のギネスは国会議員で，アイルランドの醸造会社ギネス社の後継者。夫妻はイエーツ，AE, the Laverys 等，アイルランド文学復興運動に係わった人々と親しく交わった。ジョイスは『ユリシーズ』のなかのロータスイーターズの章に夫妻を登場させている。19世紀の終わりころ，夫人はマクルーム城を受け継いだ。独立戦争のときにその城は焼失した。夫人はその遺跡をアイルランドの人々に売った。

『女の世界』には寄稿していない。

(8) ジューヌ夫人 Jeune：スーザン・マリー・エリザベス・スチュワート＝マッケンジー・ジューヌ Susan Marie Elizabeth Stewart-Mackenzie Jeune（1849？－1931)。最初，オールダリーの初代

スタンリー卿の次男で中佐のジョン・コンスタンティン・スタンリー閣下（1837－78）と結婚。1881年８月には法律家のフランシス・ジューヌと結婚。彼は最初ナイトに叙せられ，のちにセント・ヘリエル男爵 Baron St. Helier に叙せられた。彼女は社交界のホステスとして名を馳せた。

『女の世界』に“The Children of a Great City”を寄稿している。

(9) ミス・ハリソン Harrison：おそらく Jane E. Harrison（1850－1928）のことではないかと思われる。古典学者であり人類学者。著作に *Mythology and Monuments of Ancient Athens*（1890）, *Prolegomena to the Study of Greek Religion*（1903）, *Themis*（1912）, *Ancient Art and Ritual*（新版1948）などがある。

『女の世界』に“The Pictures of Sappho”を寄稿している。

(10) ミス・メアリー・ロビンソン Miss Mary Robinson：アグネス・メアリー・フランシス・ダルメストレール（Agnes Mary Francis Darmesteter）（1857－1944）。フランスのオリエント学者, ジェイムズ・ダルメストテール（James Darmesteter）（1849－94）の妻。寓話的に女性解放問題を扱った小品を発表。彼女の女性論は『青鞜』を通して日本にも翻訳・紹介された。小説や詩のほかに，エミリー・ブロンテ伝（1883），ジョージ・エリオット伝（1883）などの伝記も書いた。小説家のメイベル・ロビンソン（Mabel Robinson）の姉妹。(『平凡社大百科事典』参照)

ワイルドは1888年12月の『女の世界』のなかの“A Note on Some Modern Poets”でメアリー・ロビンソンの *Poems, Ballads and Garden Play* に触れている。彼女は『女の世界』に“La Californie. Sonnet “ と“A Walk through the Marais”を寄稿している。また, メイベルも『女の世界』に「扇」と「タリアン夫人」と“Josephine Beauharnais”いう記事を寄稿している。

(11) ミス・オリーヴ・シュライナー Miss Olive Schreiner：（1855－1920）。メソジスト派の宣教師の娘としてケープタウンで生まれる。独学で学び,『アフリカ農場物語』の手稿を携えて1881年に渡英。同作品はメレディスの賞賛を得てラルフ・アイアン（Ralph Iron）という男性名のペンネームで1883年に出版，好評を得た。宗教的懐疑とフェミニズム的主張を盛り込んだこの小説は1890年代に多く書かれた〈新しい女〉を描く小説の先駆けとなる小説であった。1889年南アフリカに戻り, 94年，同地の政治家と結婚。

『女の世界』には“Dream of Wild Bees”, “Life’s Gifts”, “The Lost”を寄稿している。

(12) レイディ・グレヴィル Lady Greville：Violet Beatrice（Beatrice Violet とされるときもある）。（1842－1932）。小説家で劇作家。第４代モントローズ公爵, ジェイムズ・グレアムの娘で, 1863年に初代グレヴィル卿の跡継ぎと結婚。1880年代から90年代にかけてジャーナリズムで活躍。社交界のゴシップ記事や女性のスポーツや余暇についての記事を書いた（Onslow 226）。また, 彼女の脚本, *The Baby; or, a Warning to Mesmerists*（1891）は92回連続公演された（Powell 151）。編書に *Ladies in the Field, Sketches of Sport*（1894）がある。

『女の世界』には寄稿していない。

(13) ミス・ドロシー・テナント Miss Dorothy Tennant：（1855－1926）。挿絵画家・肖像画家・風俗

画家。スレイド美術専門学校で学ぶ。王立美術院，グロヴナー・ギャラリーなど，さまざまな傾向の展覧会や画廊に出展。新古典主義的な絵を描いた。1890年，アフリカ探検で有名なスタンレー卿（Sir H. M. Stanley）（1841－1904）と結婚。Lady Stanley となる。1909年，Stanley の伝記に挿絵を描いた。

『女の世界』にはシングルトン夫人の“The Mer-Baby. Poem”（1888年８月）に挿絵を描いている。

⑭ レイディ・ヴァーニー Lady Verney：フランセス・パーセノペ(Frances Parthenope)(1819―1890)。旧姓ナイチンゲール（Nightingale）。看護婦の地位向上に尽くしたフローレンス（Florence）・ナイチンゲールの姉。裕福な家に生まれ，姉妹は父に教育を受けた。1857年，ハリー（Harry）・ヴァーニーはフローレンスに結婚を申し込むが断られ，1858年パーセノペと結婚。姉妹は仲がよく，ハリー・ヴァーニーもフローレンスの活動を議会で応援した。レイディ・ヴァーニーはダービシャー方言で *Stone Edge*（1868）他の小説を書いた。またエッセイ集に *Peasant Properties and Other Selected Essays*（1885）がある。（Lambton および Giner 参照）。

『女の世界』には寄稿していない。

⑮ レイディ・ディルク Dilke：（1840―1904）。旧姓はエミリー・フランシス・ストロング（Emily Francis Strong）。美術批評家，女性問題および社会問題についての著作家，労働組合運動の活動家。父親は退役陸軍士官であり，銀行支配人。オックスフォード近くのイフレー Iffley に生まれる。ロンドンで美術を学ぶ。オックスフォードの教師，マーク・パッティソンと結婚し，当時の著作（美術史や美術批評）には，E. F. S. Pattison という性別の分からない署名をした。1870年代に彼女はひそかにファーストネームをエミーリア Emilia と変え，1885年，著名な政治家のサー・チャールズ・ディルクとの再婚に当たって，そのファーストネームを正式なものにした。その後，彼女はレイディ・ディルクとして，有名な知識人であり，フェミニストであり，美術批評家であり，著作家となった。のちにほぼ20年にわたって婦人労働組合連盟の会長をつとめ，よく活動し評判がよかった。ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』のドロシアのモデルだと言われていたが，サー・チャールズはそれをつねに否定していた。彼女について詳しくは Israel による詳しい伝記を参照のこと。

ワイルドは『女の世界』（1889年４月号）の中で，彼女の *Art in the Modern State*（1888）を書評している。

⑯ レイディ・ダファリン Dufferin：ダファリン・アンド・アーヴァ侯爵夫人，ハリオット・ジョージナ・ローワン Hariot Georgina Rowan, Marchioness of Dufferin and Ava（1844―1936）。旧姓，ハミルトン Hamilton。1862年，初代ダファリン・アンド・アーヴァ侯爵，フレデリック・テンプル・ハミルトン＝テンプル＝ブラックウッド Frederick Temple Hamilton-Temple-Blackwood, 1 st Earl of Dufferin, 1 st Marquess of Dufferin and Ava（1826―1902）と結婚。夫は1872―78年カナダ総督。ケベックに住んだ。カナダ各地への視察についていった最初の妻。毎週，アイルランドの母のところに手紙を書き，のちにそれらを『わたしのカナダ日記』*My Canadian Journal*（1891）として出版。その後，夫は1884年―1888年インド総督。彼女はインドの女性に女たちによる援助をする全国組織，National Association for Supplying Female Aid to the

Women of India の設立，発展に力を尽くした。また1885年にはインドに病院を建て，特に産婦人科に関しては現地人の女医や看護婦を育成する目的で，ダファリン伯爵夫人インド医学基金 Countess of Dufferin's Indian Medical Fund を設立。（"Women's History"参照）。*Our Vice-Regal Life in India*（1891）を出版。子供７人。

『女の世界』には寄稿していない。

⑰ レイディ・コンスタンス・ハワード Constance Howard：不明。
『女の世界』に「キット・ハットン：ガーンジー島のコーネット城の本当の話」と「カービー・ホール」という記事を寄稿している。

⑱ マシュー・アーノルドのお嬢さん：マシュー・アーノルド（1822－1888）には1858年生まれの長女 Lucy Charlotte と1861年生まれの次女 Nelly の二人の娘がいたが，どちらのことを考えていたのか不明。

『女の世界』にはそのどちらの娘も寄稿していない。

⑲ レイディ・ブラッシー Brassey：ブラッシー男爵夫人，アニー・オールナット（Lady Annie Allnutt, Baroness Brassey）（1839－1887）。旅行家・収集家・著作家・アマチュア写真家。1860年，トーマス・ブラッシー Thomas Brassey（1836－1918）と結婚。彼はその父親が鉄道で得た莫大な財産の相続人であった。彼は政治家として成功し，1886年男爵に叙せられ，1911年伯爵に叙せられた。夫妻は４人の子供たちともに，1869年から1887年にかけて一家の蒸気船サンビーム号で何度かの世界各地への旅行をし，膨大な量の物品を収集し，また膨大な量の写真をとった。彼女はそれぞれの旅行のたびに旅行記を出したが，3冊目の『サンビーム号の旅』*A Voyage in the Sunbeam*（Longmans, Green, 1878）は当時のベストセラーになり，17ケ国語に翻訳された。彼女は旅行の途中でマラリア熱にかかって没した。"The Brassey Family"および"The Brassey Travels"を参照のこと。

『女の世界』には寄稿していない。

⑳ レイディ・ベクティヴ Bective：Lady Alice Maria.（？－1928）。1867年，第４代 Marquess of Downshire となる Earl of Bective（1893没）と結婚。八〇年代にはエネルギッシュに慈善活動をした。たとえば，当時ヨークシャーの毛織物が不況であったのをみて，その需要を高めようと，女性がイギリス製の素材を着るようにというキャンペーンをしたのもその一例である。（"Barnacre Lodge"参照）。

『女の世界』には寄稿していない。

㉑ レイディ・ロズベリー Rosebery: 旧姓：ハナ・ド・ロスチャイルド（Hannah de Rothschild）。（1851－1890）。ユダヤ人の金融資本家ロスチャイルド家の一人娘で，1874年に父親が，1877年に母親が死ぬと，その全財産を受け継ぎ，イギリスで最も財産家の女性のひとりになった。1878年，自由党の政治家の第五代ロズベリー伯爵，フィリップ・アーチボルド・プリムローズ（Philip Archibald Primrose, 5 th Earl of Rosebery）と結婚。この雑誌の発足当時，夫は第三次グラッドストーン内閣（1886年より）の外務大臣に任命されていた。後に彼は首相になった

（1894－1895）。なお，ワイルドの恋人であったアルフレッド・ダグラスの兄，ドラムランリグ子爵は，1894年，ロズベリーの秘書をしていたとき，ロズベリーとの同性愛が暴露されそうになって，不審な死をとげた。

『女の世界』には寄稿していない。

(22) レイディ・ドロシー・ネヴィル Dorothy Nevill：旧姓 Walpole（1826－1913）。ゴシック小説，『オトラント城』の作者，ホレス・ウォルポールの子孫で，（二度目の伯爵家の）第三代オーフォード Orford 伯，ホレイシオ・ウォルポールの娘。著作家・園芸家・収集家。1847年，レジナルド・ヘンリー・ネヴィルと結婚。サセックスの広大な庭にさまざまな珍しい植物を収集し，ダーウィンとも親交を結んだ。ディズレイリーとは終生の友人。（*Westminster's Commemorative Green Plaques Scheme* 参照）。後年，回想録を数冊出している。*The Reminiscences of Lady Dorothy Nevill*（1906），*Leaves from the Notebook of Lady Dorothy Nevill*（1908），*More Leaves*（1909），*Under Five Reigns*（1910），*My Own Times*（1912）。

1888年６月の『女の世界』に「コブデンの思い出」を寄稿している。

(23) シングルトン夫人（ヴァイオレット・フェーン）Singleton（Violet Fane）: Mary Montgomerie Lamb（1843－1905）。家族に執筆を反対され，1870年代からヴァイオレット・フェーン（ディスレイリの『ヴィヴィアン・グレイ』の登場人物から）のペンネームで著作活動をする。最初の結婚で Mary Montgomerie Singleton となり，二度目の結婚でコンスタンティノープル及びローマ在住大使 Currie 卿と結婚。『ニュー・リパブリック』のある登場人物のモデルだった。作品には，*From Dawn to Noon*（最初の詩集）（1872），*Denzil Place, a story in verse*（1875），*Collected Verses*（1880），*Autumn Songs*（1889），*Betwixt Two Seas. Poems and ballads written at Constantinople and Therapia*（1900［1889］）などがある（"Lesser Poets"参照）。

ワイルドは彼女の *The Story of Helen Davenant*（1888－89）を『女の世界』（1889年２月）で書評している。彼女は『女の世界』に"Hazeley Heath. Sonnet"（1887年11月），"Records of a Fallen Dynasty"（1888年５月）および"The Mer-Baby. Poem"（1888年８月）を寄稿している。

(24) レイディ・ダイアナ・ハドルストン Diana Huddleston：（1842－1905）第九代セント・オールバンズ公爵の娘。高等法院判事 Sir John Walter Huddleston（1815，もしくは1817－1890）と結婚。Bestwood Lodge, Nottinghamshire に住んだ。（Jacks 参照）。

『女の世界』には寄稿していない。

(25) レイディ・キャサリン・ギャスケル Catherine Gaskell：Catherine Milnes Gaskell（1857－1935）。1876年，Gerald Milnes Gaskell と結婚後，Wenlock Abbey に住み，そこを芸術家や文学者たちのメッカにした。ヘンリー・ジェイムズは1877年，1878年，1882年にそこを訪れており，トーマス・ハーディ夫妻は1893年８月13日に訪れている。作品に，シュロップシャーについての小品，*Spring in a Shropshire Abbey*（1905），軽い読み物の *Episodes in the Lives of a Shropshire Lass and Lad*（1908），*Prose Idylls of the West Riding*（？），*Woman's Soul*（？）がある。（Dickins 参照）。

『女の世界』には寄稿していない。

(26) レイディ・パジェット Paget：Violet Paget（1856－1935）。フランスで生まれ，生涯の大部分をイタリアで暮らし，ヴァーノン・リー（Vernon Lee）というペンネームで40冊以上の小説を書き，数多くの記事を発表した。レズビアンであった。多くの作品のなかでも，*Miss Brown* Vols. 1－3（1884），*Vanitas: Polite Stories*（1892），*Hauntings: Fantastic Stories*（1890），*Limbo and Other Essays*（1897），*Gospels of Anarchy and Other Contemporary Studies*（1908）はすべて，インターネットの Victorian Women Writers Project Library で読める（〈http://www.indiana.edu/cgi-bin-ip/letrs/vwwplib.pl〉）。彼女の生涯については詳しくは Stableford を参照のこと。

『女の世界』には寄稿していない。

(27) ミス・ローザ・マルホランド Rosa Mulholland：（1841－1921）アイルランドの作家。ベルファストでカトリックの医者の家に生まれ，家で教育を受ける。Ruth Murray という名前で発表した最初の小説，*Dumara*（1864）がチャールズ・ディケンズに認められ，ディケンズの雑誌，*All the Year Round* に *Not to Be Taken at Bed-Time* を発表。1891年，ダブリンの骨董収集家で歴史学者の Sir John Gilbert と結婚。夫とともにアイルランドの民間伝承を収集。彼は1898年に死亡。彼女は50年以上にわたる執筆活動をし，数多くの小説を書いた。「彼女の態度は「われわれはヴィクトリア朝の良家のアイルランド人だ」という言葉に要約できるが，……後には……ナショナリズムに接近した」（“Mulholland, Rosa”）。最も有名な小説は *A Fair Emigrant*（1888）。*Not to Be Taken at Bed-Time*（1865）は（〈http://users.ev 1. net/ homeville/isfac/d 91. htm〉）で読める。（Boylan, “Rosa Mulholland”参照）。

『女の世界』には「ダブリン城」を寄稿している。また，ワイルドは彼女の *Marcella Grace* を *PMG* の“A Batch of Novels”（1887年５月２日）で書評している。

(28) エミリー・ローレス閣下 the Hon. Emily Lawless：（1845－1913）。アイルランドの詩人・小説家。アイルランド文芸復興運動を担うひとり。クロンカリー卿（Lord Cloncurry）の娘。キルデアのライアンズ城（Lyons Castle）で生まれた。自然史への興味からアイルランドの自然の中での暮らしにひかれ，のちにはアイルランド西部の民衆への共感を示す作品を書いた。作品には，*Hurrish: A Study*（1886），*Ireland*（1887），*With Essex in Ireland*（1890），*Grania*（1892），詩集で代表作の *With the Wild Geese*（1902）などがある。（“Women Writers. IX. Anglo-Irish Literature. Vol. 14”参照）。

『女の世界』には寄稿していない。

(29) レイディ・ハーバートン Harberton：ハーバートン子爵夫人フローレンス Florence, Viscountess Harberton（1844－1911）。1881年，キング夫人とともに合理服協会（the Rational Dress Society）を発足させ，婦人服改良の精力的なキャンペーンを展開した。淑女らしいドレスを着るべきだとする当時の考え方に対して，もっと健康的な服を着るべきだとした。彼女は特に自転車に乗るための服を唱導，当然，女権拡張運動と関係しており，婦人参政権運動家であった。ワイルドは1883年の協会の会合の唯一の男性参加者であったという。

彼女は『女の世界』に「朝の服装と習慣」という記事を寄稿している。

(30) チャールズ・マクラーレン夫人 Charles McLaren：ローラ・エリザベス・マクラーレン Laura

Elizabeth McLaren（？－1933）。旧姓 Pochin。1877年，実業家で政治家のチャールズ・ブライト・ベンジャミン・マクラーレン Charles Bright Benjamin McLaren（1850－1934）と結婚。彼はクエーカーで婦人参政権運動を支持していた。チャールズの母は婦人参政権運動家として著名なプリシラ・ブライト・マクラーレン Priscilla Bright McLaren（1815－1906）。ローラも義母と同じく婦人参政権運動家であり，『婦人参政権ジャーナル』*Women's Suffrage Journal* にも寄稿している。

『女の世界』には「男の優越性という誤謬」を寄稿した。

(31) レイディ・ポロック Pollock：ジュリエット・クリード Juliet Creed（？－1899）。一八七〇年，第二代准男爵に叙せられたウィリアム・フレデリック・ポロック（1815－88）と結婚。マクレディの友人で劇場に深い関心をもち，エレン・テリーを主演女優にするようアーヴィングに勧めた。W・H・ポロック（Wilde 246注１参照）は彼女の次男であった。

『女の世界』の1888年４月号に「演劇の美術との関係」を寄稿している。

(32) フォーセット夫人 Mrs. Fawcett：Millicent Garrett Fawcett（1847－1929）が『女の世界』に「婦人参政権」という記事を寄稿していることからして，ほぼ確実にこの著名な婦人参政権運動家のことだろう。英国の著名な婦人参政権運動家。オールドバラの大商人の娘。1867年，盲目の経済学者で自由党議員のヘンリー・フォーセット（1833－84）と結婚。夫の生前は彼の著作活動を助ける。1871年，ケンブリッジ大学にイギリス最初期の女子大学ニューナム・コレッジを創設。1897年，停滞・分裂していた婦人参政権諸団体を統合し，全国婦人参政権同盟を結成，その総裁になる（1897－1919）。国際婦人参政権同盟副会長。第一次大戦後，Dame の称号を授与される。著書に『初心者のための政治経済学』（1870）や小説，『ジャネット・ドンカスター』（1875）などがある。姉のエリザベスもフェミニストで，女医の先駆者。

『女の世界』には，「婦人参政権」という記事を寄稿している。

(33) ミス・ペイター：クレアラ・アン・ペイター Clara Ann Pater（1841－1910）。ウォルター・ペイター（1839－94）の妹。独身の姉と一緒に兄の家政を切り盛りする。独学でラテン語とギリシア語（これらは当時は男の学問とされていた）を学び，1870年代には「オックスフォード一の女性の座談家」とみなされた（Seiler ８）。ペイターの原稿の一部分には彼女の筆跡のものがあり，おそらく共作をしていたと見られる（Seiler ８）。オックスフォードでの女性の高等教育の促進に尽くし，1881年にサマヴィル・コレッジの副校長となり，1894年まで古典の教師を務めた。1885年以降は，兄とともに週末はロンドンで暮らした。兄の死後，サマヴィル・コレッジを退職し，ロンドンで私塾を開いた。その教え子の一人にバージニア・ウルフがいた。

日本では早い時期に，萩原博子がクレアラ・アン・ペイターについて調査している（萩原）。

『女の世界』には寄稿していない。

(34) レイディ・ベティ・リットン Betty Lytton：ワイルドの『書簡集』389ページにある注には次のようにある。「ほぼ確実に，初代リットン伯爵の長女，レイディ・エリザベス・エディス（一八六七－一九四二）のこと。ジェラルド・ウィリアム・バルフォア（一八五三－一九四五）と結婚（一八八七）。彼は兄の後を継いで，一九三〇年，第二代バルフォア伯爵に叙せられた。」

彼女は婦人参政権運動に熱心だった。
『女の世界』には寄稿していない。

(35) レイディ・ソールズベリー：ジョージナ・旧姓オルダーソン（1827－99）。Sir Edward Holt Alderson, a baron of the Court of Exchequer の娘。1857年, Robert Arthur Talbot Gascoyne Cecil（1830－1903）と結婚。1869年彼は第３代ソールズベリー侯爵になる。1885－86年, 1886－92年, 1895－1902年の３度保守党の首相となった。この雑誌創刊時，彼女は首相夫人であった。
『女の世界』には寄稿していない。

(36) プロクター夫人 Proctor：アン・ベンソン・プロクター Anne Benson Proctor（Procter と綴られることもある）（1799－1888）。旧姓スケッパー Skepper。著作家。詩人の Bryan Waller Procter（‘Barry Cornwall’）と結婚。1881年,『カーライルの手紙』を個人出版。ブラウニング夫妻やトロロープの友人で，手紙をやりとりしていた。夫はディケンズの古くからの友人。長女のアデレイド・アン・プロクター Adelaide Anne Proctor（1825－64）は詩人で慈善家だった。（“Biography for Anne Benson Procter”参照）。
『女の世界』には寄稿していない。

(37) レイディ・ゴールウェイ Galway：Maria Carola, Lady Galway。旧姓 Blennerhasset。夫の Henry Lionel, Lord Galway（1859－1949）はオーストラリア総督。彼女は1914年に赤十字を南オーストラリアに創設。ナショナル・ポートレート・ギャラリーに写真がある。
『女の世界』には寄稿していない。

(38) ハンフリー・ウォード夫人：メアリー・オーガスタ・アーノルド・ウォード（Mary Augusta Arnold Ward）（1851－1920）。ラグビー校校長 Thomas Arnold の孫であり，詩人のマシュー・アーノルドの姪。1879年，オックスフォード大学の女子コレッジ，サマヴィル・コレッジ創立と同時に，その最初の書記官になった。女子の高等教育推進には熱心だったが，女が政治の分野に進出することには強く反対。1908年婦人参政権反対同盟を組織。作品に, *Robert Elsmere*（1888）, *Marcella Vols*. 1－２（1894）, *The Story of Bessie Costrell*（1895）, *Daphne, or Marriage a la Mode*（1909）, *England’s Effort: Six Letters to an American Friend*（1916）などがある。これらはすべて, インターネットの Victorian Women Writers Project Library で読める（〈http://www.indiana.edu/cgi-bin-ip/letrs/vwwplib.pl〉）。
『女の世界』には寄稿していない。

(39) シジウィック夫人 Sidgwick：エレナー・ミルドレッド・シジウィック（1845－1936）。A・J・バルフォアの一番上の姉で, ケンブリッジの哲学者ヘンリー・シジウィック（1838－1900）と結婚。婦人参政権および婦人の高等教育を求める運動の中心的推進者であり, 1892年から1910年にかけては，ケンブリッジのニューナム・コレッジの校長の任にあった。彼女自身は長年にわたって, ニューナムに計30,000ポンド以上の寄付をしたと言われている。1908年, 心霊研究協会の会長に選ばれ，退職後は死後の生命の可能性の学術的研究に没頭した。
『女の世界』には寄稿していない。

(40) T・ハーバート・ウォレン夫人 Herbert Warren：不明。夫のT・ハーバート・ウォレン（1853－1930）は古典学者で運動家。1885－1928年，オックスフォード，モードレン・コレッジの学長。『女の世界』には寄稿していない。

Ⅲ

ワイルドが貴族や称号のある人々を好んだということはよく言われる。もちろんそれはその通りだろう。だが，ルイーズ妃やクリスチャン妃が単なるお飾りではなく，ものを書くだけの仕事をしている女でもあったことは上の調査で明らかにした通りだし，ルーマニア王妃のカルメン・シルヴァは盛んに執筆活動をしていた。当時の首相夫人のレイディ・ソールズベリーと外務大臣夫人のレイディ・ロズベリーについては，彼女たちがものを書いていたという記録は見つけられなかった。だが，一般的にはレイディの称号のつく女たちが中産階級の女たちよりも高い教育を受けていることは確かだろう。実際，ここでワイルドが挙げている多くの称号のある女たちの多くは，すでに多様な分野で活躍している女たちだ。

さらに，少なくともジュリア・ウォード・ハウ夫人，オリーヴ・シュライナー，レイディ・ディルク，レイディ・ハーバートン，チャールズ・マクラーレン夫人，ミリセント・フォーセット，レイディ・ベティ・リットン，シジウィック夫人の８人は婦人参政権運動の活動家であったり，「新しい女」であったことがはっきりしている。だがむろん，「新しい女」も多様だ。たとえばハンフリー・ウォード夫人のように婦人参政権運動には反対でも，女子の高等教育推進には熱心な女も，ある意味では「新しい女」であろう。また当時の女らしさの規範からはずれる女という意味では，もっと多くの「新しい女」がいる。たとえば，ルイーズ妃は当時女らしくない技芸とされた彫刻の分野で玄人であったし，古典も当時は女の学問ではなかったが，その世界の専門家であったミス・ハリソンやクレアラ・アン・ペイター，さらに大旅行家であり，ベストセラーの旅行記を書いたレイディ・ブラッシーなどである。ワイルドは「ドレスのことは雑誌の端に追いやり，文学，美術，旅行，それに社会学を大きく扱いましょう」（Wilde 318）と同じ手紙で述べている。ワイルドは確かにドレスのことを追いやって，「新しい女」をめぐるさまざまな言説を誌上に載せようとしたのである。

この雑誌の現状のありようは，むろん Green の言うように矛盾に満ちたものにならざるをえなかったであろう。事情はこうではなかったか。かつて筆者はワイルドが1887年に書いた短編「謎のないスフィンクス」の分析を通して，ワイルドとフェミニズム運動との係わりを次のように論じたことがある。ワイルドがはじめて同性間の性行為を行ったのは1886年のことだとされる。そしてワイルドにとってのホモセクシュアルとは，男でない男になることであった。ワイルドは，男という物語の解体を企てる。それには女という物語を撹乱させるような女，「新しい女」が必要だ。だが，ジェンダーの二項対立にからめとられたこの世界において，男でない男も男でしかありえないし，「新しい女」も女でしかありえない（角田）。だからワイルドは1887年に女性雑誌の編集の誘いを受けたとき，喜んでその誘いに応じ，「新しい女」たちの言説を広めようとする。だが，むろんその雑誌はフェミニズムの機関紙というわけではないし，採算を考えれば広い読者層をねらって折衷的なものにせざるをえない。そうした事情に加えて，ホモセクシュアルの男と「新しい女」も男と女として対峙せざるをえないという認識のせいで，ワイルドは次第に雑誌編集に熱意を失っていったのだろう。だが少なくとも編集を引き受けた当初，ワイルドが結構まじめに「新

しい女」を台頭させようとしたことは，明らかだろう。

注

1 さらに，レイディ・アーディロウン，ローザ・マルホランド，エミリー・ローレス閣下という３人が多少なりともアイルランド文芸復興にかかわっていることも，特記しておくべきだろう。ワイルドは後にレイディ・グレゴリーにも執筆依頼の手紙を書いている（Wilde 319）。

引用文献

"Barnacre Lodge." 27 sept. 2003〈http://www.lancshalls.co.uk/Wyre/barnacrelodge.htm〉.

"Biography for Anne Benson Procter." *The Correspondence.* 29 Aug. 2003. Centre for Whistler Studies. 15 Sept. 2003〈http://www.whistler.arts.gla.ac.uk/biog/Proc_ AB.hrm〉

Boylan, Henry Ed. *A Dictionary of Irish Biography.* Dublin: Gill & Macmillan, 1998.

"Brassey Family, the." 27 Sept. 2003〈http:www.hastings.gov.uk/hmag/durbarHall/theBrasseyFamily.asp〉.

"Brassey Travels, the." 27 Sept. 2003〈http:www.hastings.gov.uk/hmag/durbarHall/theBrasseyTravels.asp〉.

"Carmen Sylva Queen Elisabeth of Romania Bibliography." 02 July. 2003〈http://www.tkinter.smig.net/CarmenSylva/Bibliography.htm〉.

Clayworth, Anya. "The Woman's World: Oscar Wilde as Editor." *Victorian Periodicals Review.* No. 30（1997）.

Dickins, Gordon "Catherine Milnes Gaskell." *An Illustrated Literary Guide to Shropshire.* Shropshire Libraries, 1987. 30 Aug. 2002〈http://home.freeuk.com/castlegates/gaskellc.hrm〉.

Giner, Maria F Garcia-Bermejo. "Lady Frances Parthenope Verney's Novels as a Source for Nineteenth-century Derbyshire English." *Methods XI : Abstracts and Papers.* 2 Feb. 2002. Joensuun Yliopisto. 30 Aug. 2002〈http://www.joensuu.fi/fld/methodsxi/abstracts/giner.html〉.

Green, Stephanie. "Oscar Wilde's The Woman's World." *Victorian Periodicals Review.* No. 30（1997）.

萩原博子「クレアラ・アン・ペイター覚え書」『城西人文研究』第４号（1977）。

――――「クレアラ・アン・ペイター覚え書（Ⅱ）」『城西人文研究』第５号（1978）。

『平凡社世界大百科事典』東京：平凡社, 1988.

Ibarra, Jesus. "Helena of Great Britain, Pincess Christian of Schleswig Holstein（1846-1923）". 27 Sept. 2003〈http://www.geocities.com/jesusib/Helena.html〉.

Israel, Kali. *Names and Stories: Emilia Dilke and Victorian Culture.* New York and Oxford: Oxford UP, 1999.

Jacks, Leonard. "Bestwood Lodge." *The Great Houses of Nottinghamshire and the Country Families.* Nottingham, 1881. 30 Aug. 2002〈http://www.cthulu.demon.co.uk/Jacks 1881/bestwood_lodge.htm〉.

Ksinan, Catharine. "Wilde as Editor of Woman's World: Figuring a Dull Slumber in Stale Certitudes." *English Literature in Transition*, 41（1998）.

Lambton, Lucinda. "Ode to a Nightingale." *Florence Nightingale: Claydon House.* 30 Aug. 2002〈http://www.countryjoe.com/nightingale/claydon.htm〉.

"Lesser Poets of the Middle and Later Nineteenth Century: Bibliography." *The Cambridge History of English and American Literature in 18 Vols （1907-21）*. 2002. Bartleby. 30 Aug. 2002〈http://www.bartleby.com/223/0600. html〉.

Lewis, Brenda Ralph. "Princess Louise." *Britannia Biography.* 1998. Britannia Internet Magazine. 26 sept. 2003〈http://www.britannia.com/history/biographies/louise.html〉.

"Mulholland, Rosa." *The Literary Gothic.* 30 Aug. 2002 〈http://www.litgothic.com/Authors/mulholland.html〉.

New Encyclopaedia Britannica, the. 15 the edition. 1997.

Onslow, Barbara. *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain.* Basingstoke: Macmillan, 2000.

Powell, Kerry. *Oscar Wilde and the Theatre of the 1890s.* Cambridge: Cambridge UP, 1990.

Seiler, Robert M. "Introduction." *The Book Beautiful: Walter Pater and the House of Macmillan.* London and New Brunswick: Athlone, 1999.

Stableford, Brian. "Haunted by the Pagan Past: an Introduction to Vernon Lee." *Infinity Plus Introduces.* 2001. Infinity Plus. 29 sept. 2003〈http://www.infinityplus.co.uk/introduces/lee.htm〉.

角田信恵「ホモセクシュアルの男と「新しい女」――Oscar Wilde の"Sphinx without a Secret"――」『英語青年』Vol. CXLII No. 10.

Westminster's Commemorative Green Plaques Scheme: Lady Dorothy Nevill (1826-1913). 14 Nov. 2000〈http://www.westminster.gov.uk/ep/plaques/displaybyname.clm〉.

Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde.* Ed. Merlin Holland & Rupert Hart-Davis. New York: Henry Holt, 2000.

"Women Writers. IX. Anglo－Irish Literature. Vol. 14. The Victorian Age." *The Cambridge History of English and American Literature in 18 Vols (1907-21)*. 2002. Bartleby. 30 Aug. 2002〈http://www.bartleby.com/224/0923. html〉.

"Women's History." *On the Record.* 22 Sept. 1997. Public Record Office of Northern Ireland. 15 Sept. 2003〈http://proni.nics.gov.uk/exhibiti/ontherec/womens.htm〉